
JAIL HOUSE COOK

酔眠隼丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JAIL HOUSE COOK

【著者名】

N6764C

【作者名】

醉眠隼丸

【あらすじ】

エルヴィス・プレスリーの“Jailhouse Rock”を聞いて思いつきました。内容は『刑務所の中で料理人として働く男』の話です。いきなりの思いつきですが何とか執筆を続けていこうと思っています（笑）

『0』 プロローグ

普通の、平凡な会社のオフィスに怒鳴り声が響いた。

「何でこんな単純なミスするんだよッ！」

「はあ、すみません・・・」

どうやら普通の、平凡な会社員、^{ヤマダノリコキ}山田紀幸^{ヤマダノリコキ}が怒られているようだ。

紀幸は“この会社”に勤めるサラリーマンである。中肉中背よりやや痩せ気味、手先は器用で料理が得意という事以外はこれとつて特徴のない、まさに『吉良吉影』の様な男だ。

「すみませんじゃないよッ！お前のミス何個田だと思つてるんだツ！？」

「えっと、42個田ですね・・・」

とにかく紀幸はミスが多い。なぜか？“この会社”が彼に向いてないからである。

「42個田ですね、じゃないよッ！つたぐ、もうお前明日から来なくていいからなツ！」

「はあ・・・」

・・・次の日、あつさつと会社をクビになつた紀幸は自宅で求人雑誌を読んでいた。

「あーあ、流石に7回も会社クビになると精神的にまいつてくるわな。どつかに俺に向いてる職業でもないかねえ・・・？」

と、紀幸の目はページの隅っこに小さく書かれた文字を見つけた。

“^{ジエイルハウスコック}刑務所料理人募集中、志願者は 事務所まで”

「・・・！？これだツ！！」

そう叫ぶと紀幸は一目散に指定の事務所まで駆けて行つた。

『0』 プロローグ（後書き）

どうでしたか？

感想、意見、指摘など、何でもお待ちしております。

『1』準備（前書き）

ペンネーム変更に混乱した方、申し訳ありません。
気分転換に変えてみました（笑）

「・・・それで料理は得意だから申し込もうとしたわけですね？」

「ええ、そうです。」

「じゃこの書類に必須事項を記入して、簡単な質問に2、3答えて頂けますか。」

「あ、はい。」

早速面接に来た紀幸は、書類を見て不思議に思った。

（何か簡単すぎねえか・・・？）

「書き終わりましたか？それじゃあ最後にここにサインをお願いします。印鑑でも結構ですんで。」

紀幸は言われるままに書類に記入し、サインをして完成させた。
「それじゃあ以上で終わりです。今日は金曜日なんで・・・来週の火曜日までにこれをそろえておいて下さい。」

そう言つと面接官は一枚の紙を取り出し、紀幸に渡した。

「え、もう終わりですか？」

「はい。万点中満点、合格です。」

そういう残して面接官は部屋を出て行つた。

「おいおい、いいのか？こんなで・・・つてマジかよー？」

紀幸は今さつき手渡された紙に目をやつて驚いた。そこには

“勤務に必要な道具・その他、以下各項目をそろえること”

と書かれていて、そのあとに続いて聞いた事のないようなものまで
ビッシリと書き込まれていた。

「後一日でこれ全部そろえんの・・・？冗談キツイぜ・・・
とりあえず紀幸は近所の雑貨屋へと走つた。

「あとは・・・サバイバルナイフう？」これは文化包丁でいいや。」
紀幸は多大なる努力により、“必要な物リスト”の半分近くが手に入っていた。

・・・と言つても日本国内でてに入るものに限つてだが。

「つたく、こんなの何に使うんだよ・・・」

そう、“必要な物リスト”の残り半分は到底日本国内じゃ手に入りそうにないものばかりであつた。
「ふうう、ま、足りないもんは代用すりやいいか。」
紀幸はこのときにはまだこれから起る事の重大さを、微塵も考えてはいなかつた・・・

『1』準備（後書き）

どうでしたか？

次回から本格的に物語りに入っていく予定ですので。

『2』囚人はスタンド使い

申し込んでるやつは、俺のほかにもいた。

「えー、みなさんお集まりですか？」

黒いスーツを着た男が口を開いた。結局“必要な物リスト”が全部そろわないまま約束の日なつていた。

「それではみんなさんの仕事内容を簡単に説明させていただきます。まずは刑務所の設備、特色などから。」

紀幸は集まつた人々と一列に並んで話を聞いていた。

「みなさまに勤務して頂く刑務所はこの島全体を丸々改造して作られたものであり、脱走は不可能です。」

黒いスーツの男は大きく広げた地図の一角を指して話している。

「えー、しかしながらですね、いや、安全な事に変わりはないんですけど、収容されている囚人達はみな様々な“特技”と言いますか、とにかく“特異”なものばかりとして。」

一呼吸おいて、

「“超能力”のようなものを持つものばかりです。」

集まつた人々は互いに顔を見合せている。誰かが、「で、その超能力つてのはどんななんだい？」

と質問した。

「私の知る限りでは、どんな傷を負つても平氣だつたり、他人と意識だけを瞬時に入れ替えたりできるものがいます。」

「なんだ、再生能力や意識変換が収容されてんのか。」

「簡単に言うとそういうことです。もし仮にこの話を聞いて職務をまつとうする気が萎えた方はどうぞ、今のうちにお引取り下さい。」

初めのうちはみな動かなかつたが、“バカバカしい”と1人、また1人と帰つていく者が出てきた。

「それでは次に特色を・・・」

と黒いスーツの男が話し始めたときには、最初の人数の半分以下になっていた。

「・・・以上で説明を終わります。何か質問のある方は？」

黒いスーツの男の話をまとめると、

・刑務所の中の囚人は全員“超能力者”である。

・紀幸達の仕事は“ただ料理を作り、食わせる”だけ。

という非常にシンプルなものだったが、3時間近く話していた。黒いスーツの男の話すスピードが遅かつたわけではない。実際に“超能力者”的資料や映像を見ていたからである。そのため、ここに残った者のほとんどがその存在を信じていた。

「それでは今現在8人が残っていますので、3人、3人、2人のグループに分かれてください。」

どうやら島に向かうための船は“職務をまつとうする気が萎えた方”が帰つて行くにつれて、俺の仕事はもう終わつた、と言わんばかりに引き返していったようである。そのため現在残つている船は、職員用が1台と、3人乗りの船が3台という状況であつた。

「それではここと、ここと、ここで分かれてください。」

紀幸は3人グループだつた。

「同じグループだね、よろしく。」

お、この娘胸デケエじゃん。

「お、おう。よろしく。」

さて、もう1人は・・・？

「・・・よろしく。」

男だつた。それもかなり大柄な。

「う、うん。よろしく・・・」

紀幸はちょっとブルーになりながら船へと乗り込んでいった。

『2』囚人はスタンド使い（後書き）

んー、書いてて思いましたが、まだ本編に入った気がしませんね。
もう少しかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6764c/>

JAIL HOUSE COOK

2011年1月9日02時49分発行